

【研究ノート】

イギリス中世末期における地域的市場圏〔I〕

—デヴォンシャーのばあいについて—

藤 田 重 行

ま え が き

イギリス経済史において、中世末期から近代初期までのいわゆる《移行期》にそれ以前とは異なる市場構造＝地域的市場圏 regional market area が形成されていたことは、よく知られているところである。周知の大塚久雄教授は、「中世都市」と周辺の農村との分業関係によって形成される市場圏と教授のいわゆる「局地的市場圏」との対比をされた後、『こうして「農村工業」を基盤として形づくられた新しい「局地的市場圏」は、封建地代やその転化形態たる商業利潤をも購買力として逆にその中に巻きこみつつ、競争を導きの糸として互いに接合され、かつ内部に新しい階級分化（つまり購買力としての賃銀労働者層）をはらみながら、いっそう大規模な「地域的市場圏」に、ついには国民的な規模での統一的国内市場にまで成長していくのである。』⁽¹⁾と述べられ、さらに、その後の最近の著作の第一章において、周知のごとく、記述の観点を専ら市場構造の発展にあてて、前述のことがらをいっそう詳細かつ体系的に論ぜられている。要するに、教授の思考によれば、中世後期のイングランド経済を、主としてE・A・コスミンスキーとM・M・ポスタンに拠りつつ、上述の観点から領主的市場経済と農民的市場経済の対抗として捉えられ、農村における社会的分業の発達＝生産諸力の発展を基礎に小生産者相互の交換をもって形成された「局地的市場圏」を起点として発展した農民的市場経済が十五世紀に領主的市場経済を圧倒し去り⁽²⁾、「局地的市場圏」それ自体は、『資本主義の形成が進行するとともに、いやその内部から資本を押し上げながら、互いに融合しあるいは一が他を併合しつつ、しだいに規模を拡大していく。拡大しながら、「局地的市場圏」とほぼ相似的な原理の市場圏をいっそう大きな規模で作り出していく。この趨勢はイギリス経済史の上で典型に近い姿でみられるのであって、十六世紀半ばには、すでにイングランド経済は三大「地域的市場圏」でもって構成されるようになっていたが、十八世紀中葉から産業革命にかけての時期には、イングランドはついに一個の統一的国内市場圏を形成されるようになった。』⁽³⁾とされるのである。

以上のとり分け最近の著作における教授の記述は、論理的にも実証的にも首尾一貫して明快

であるが、仔細に見るならば、尚若干の疑問が残るように思われる。その一つが、地域的市場圏に関する問題であって、教授の記述にあるごとく、十六世紀中葉前のごとき早期に、「局地的市場圏」とほぼ相似的な原理の市場圏としての三つの「地域的市場圏」（——傍点筆者）に、すでに統合されていたのであろうか。十六・七世紀の《移行期》は過渡期であり、地域によっては異質の市場圏が確固と形成されていて、これが市場における競争によって解消・統合されるまでには、尚かなりの年月の経過を要したのではないだろうか。

ここにおける課題は、かかる観点から、一つの試論として、デヴォンシャーにおける地域的市場圏の発展に関する素描を試みることである。

ここでまず、それ以前のデヴォンシャーとエクセターの経済的發展から見ることにする。

- (1) 大塚久雄著「欧州経済史」1973年 岩波書店刊 pp. 104, 5.
- (2) 大塚久雄編著「西洋経済史」経済学全集4 1977年 筑摩書房刊 pp. 19—28.
- (3) 大塚 上掲書 p. 16.

1 十三・四世紀におけるデヴォンシャーと州都エクセターの台頭

(1) 十三・四世紀におけるデヴォンシャー

はじめにまず、デヴォンの地理的条件について見ることにする。それがこの州に居住する人々の生活の基礎条件となるからである。

地図⁽¹⁾を一見して分かるごとく、デヴォンは東北にソマーセットのブレンドン・ヒルズ **Brendon Hills** に続くエクスムーア **Exmoor** が拡がり、南部中央に海拔 600 メートル内外の丘陵を含むダートムーア **Dartmoor** があり、西北には丘陵が起伏して海岸近くまで延びており、そのほかにも小さい丘陵の塊が点在していて、地理的に決して恵まれたところとは言えない。しかし、北側のブリストル海峡と南側のイングランド海峡の間の半島部にあり、イングランドの北部地方や東部地方に比較すれば、遙かに気候が温暖で、雨量も多い。上述のごとく、丘陵地の多いことは確かであるが、東部のエクス川 **R. Exe** の溪谷、中流域および下流域、西部のテイマー川 **R. Tamar** の中流域と下流域、並びに、中部に源を發して北へ流れるトー川 **R. Taw** の流域地方が、いずれも平野を形成し、南部の海岸沿いや丘陵地と丘陵地の間にも、平地が拡がっている。しかし、東に接するソマーセットの西南部とドーセットの西部を掩う赤土地帯 **red lands** がデヴォンの東部にまで拡がる⁽²⁾ところを除けば、イングランド第三のこの広大な州の大部分が、それとは対照的に白土地帯 **white bands** と呼ばれる地質的に恵まれないところである。

サクソン人のデヴォンに対する攻撃は、614年のドーセット西南端のビンドン **Bindon** における

戦に始まる。その後44年の間メルシアとの戦のために平和が続いていたが、658年のピンホー Pinhoe と661年のポスベリ Posbury の両度の戦によって、サクソン人がケルト系民族の抵抗を打ち破り、肥沃な地域を占拠して残存するケルト人を丘陵地へ駆逐した⁽³⁾。その後徐々にかれらを征服し、八世紀にエクセターを支配と防衛の中心として要塞化した⁽⁴⁾。この征服に続いて入ってきた者たちは、平野部に集まり住み、次いで、州の大半を掩う森林や沼沢地をしだいに開墾・乾拓していたものごとく、最近〈ノルマン征服〉Norman Conquest 以後ほぼ三世紀半の間のイングランドの農村の状況について記したH・E・ハラム Herbert E. Hallam によれば、1086年にすでに81箇所の開墾地が存在し、140箇所が1280年後に初めて記録され、これらのうち47箇所は1350年後であることを述べ、それ故に、デヴォンが1086年ごろに十分発展していたが、その後十三世紀までいっそう発展し始めることなく、遅れて続いたとしている⁽⁵⁾。表1⁽⁶⁾でみられるごとく、確かにドゥームズデイ・ブック（以下 D.B. と略記する）の記載によれば、定住地数が記載39州中2位、耕

表1 Statistical Summary, Devon

項目別	合計	順位
Settlements	980	2
Assessment	1,142	25
Ploughlands	7,934	1
Ploughteams	5,735	1
Rural Population	17,246	4
Borough	5	4

表2 Rural Population

記載別	合計
Villeins	8,472
Bordars	4,866
Slaves	3,318
Cottars	36
Priests	28
Men	32
Swineherds	370
Saltworkers	61
Fishermen	2
Fabrus	1
Beekeepers	5
総計	17,246

表3 Domesday Borough

No.	Borough
1	Barnstaple
2	Exeter
3	Lydford
4	Okehampton
5	Totnes

表4 Livestock in 1086 by Domesday Counties

County	Norfolk	Suffolk	Essex	Cambridge	Dorset	Somerset	Devon	Cornwall
Sheep	46,176	37,817	47,013	20,512	22,025	46,868	50,024	13,059
Wethers	—	—	—	—	297	948	155	240
Swines	8,082	9,789	13,323	4,591	1,501	6,980	3,694	513
Goats	3,015	4,348	3,642	225	800	4,482	7,246	926
Animalia*	2,125	3,061	4,045	960	589	4,466	7,364	1,148
Horses	50	127	3	—	—	—	—	—
Rounceys	767	527	793	170	123	448	159	21
Mares**	195	114	21	35	25	391	318	422

* Cows, Calves, Oxen, Bull を含む。

** Wild mares, Forest mares を含む。

地面積、犁組ともに1位、そして、農村人口は4位であり、当時相対的によく拓かれた州であったことを示している。しかし、評価の査定が極めて低く、25位であることは、劣等地が多かったことを物語るものと言わなければならない。尚表2のごとき農村人口数⁽⁷⁾は4位であるが、広大な州であるために、全体としては過疎の州に入れられている⁽⁸⁾。当時人口の分布が平野ないし平地に著しく偏っていたことは、初期の村の位置を示す地図や表3のいわゆるドゥームズデイ都市^{バラ}の位置よりみて、ほぼ明らかである。それとともに、既述のごとき地理的条件の下に、トー川河口周辺を除く北半とダートムーアを除く南半とが、領主・農民ともに対照的な経営形態を示し、概ね北半を牧畜地帯、そして、南半を農業地帯と称しても過言ではない。いまH・C・ダービ Henry C. Darby が掲げるノーフォーク以下8州の種々の家畜の比較表を若干簡略化した表4⁽⁹⁾によってみると、D. B. 記載の羊、山羊および牛においてデヴォンが最多数であったことが知られる。尚、デヴォンはハイド hide 地域であるが、D. B. 記載の地積 ploughland について、W・G・ホスキンス William G. Hoskins は、必ずしもつねに ploughland=120 acres ではなく、その四分の一であるファーリング ferling が 16 acres, 30 acres あるいは 32 acres のことがあり、最もしばしば後二者のばあいが多いことと、丘陵地において ploughland の数と ploughteam の数との間に著しい乖離が認められること、すなわち前者に比して後者の著しく少ないところが少なからず存在することとに注目している⁽¹⁰⁾。

以上のデヴォンの D. B. 当時の状態は、表1によってみると、ハラムが述べるごとく、相対的には十分発展した州の一つであったと言えるが、尚未開拓の広汎なる森林地と荒野が拡がり、各河川の河口附近に乾拓の可能な海水の湿地が多かれ少なかれ存在した。続く十二・三世紀は人口増加の時代である。これに対応するために、一般に耕地の拡大すなわち開墾と乾拓とが行なわれなければならない。事実デヴォンにおいて、〈ノルマン征服〉以前から占拠しているサクソン人によって森林地や荒野の開墾が行なわれてきたことは、leah, leigh=clearing⁽¹¹⁾ や stoc=stock⁽¹²⁾ の語尾をもつ地名によってよく知られている。そして、かれらはまず集村ないし有核村落を形成して定住し、次いで、それらの周辺に多数の^{ハムレット}小村をすでに拓いており、それらの多くが D. B. に記載されていないと言われる⁽¹³⁾。荒野の開墾も進み、ダートムーアとエクスムーアでは高度1200フィートにまで達していた。ただしいっそう雨量の多い西斜面では、高度 900 か 950 フィートまでであり、ダートムーアの奥地の荒蕪地6箇所は、十四世紀初期まで植民されていなかった⁽¹⁴⁾。それでも尚未開拓の土地が多く存在していたことは事実であり、デヴォンの研究者ホスキンスは十二・三世紀における植民運動をとくに強調している。かれによれば、1204年のデヴォンの人々による5000マークでの^{チャーター}廃林の勅許状の買収が、同州のいっそう多くの部分を森林法の重荷と恐怖から解放することによって、植民運動に刺戟を与えたとし⁽¹⁴⁾、大土地所有者たちによるかれらのマナーの縁辺の土地の分与による開墾も進んではいたが、森林地の植民の事実を、十三・四世紀の交におけ

る多数の自由保有農ないし自由なるテナントの出現に求め、かれらがほぼ1150年から1250年の間に由来することは確かであると言われる⁽¹⁵⁾。事実はこれよりいっそう多くの小村が集村や有核村落の過剰人口によって拓かれていたことが想定されるが、いまこのことを別にして、肥沃なる土地の少ないデヴォンにおいて、耕地の拡大と並んで重要な問題は、生産性の高い作物を選ぶことであるろう。

タヴィストック修道院領の3マナーのワーリントン Werrington, ハードウィック Hurdwick, オッタリ Ottery について同修道院領の研究者H・P・Rフィンバーグ Herbert P. R. Finberg が掲げる各穀類の播種量に対する収穫量の倍率をみると、極端なる豊作と不作の年を除き、小麦が4—7.5倍強、ライ麦が5—10倍弱、大燕麦が4—6倍、小燕麦が4—7.5倍であり⁽¹⁶⁾、年による相違の著しいこととこれら西部のマナーにおいて大麦が栽培されなかったことが注目される。上記の各穀物の倍率は主として十五世紀の数字に基づくものであるが、溯って十三世紀前期と後期のデヴォン伯領のティヴァートン Tiverton, プリンプトン Plympton, エクスミンスター Exminster, トプサム Topsham 4マナーについてみると、1225—6年の穀物生産は60年後と非常に異なる状態を示し、プリンプトンとエクスミンスターは種子用の小麦を購入し、トプサムは少量の小麦を生産していて、1286—7年に遙かに多量の栽培を行なった小麦が、未だ新たなる実験的な作物であったものごとく、また、後代に導入された大麦は、1225—6年には全くなく、燕麦は小燕麦のみであり、その生産量は、4マナーにおける1286—7年の生産のほぼ三分の二であった。第一の作物であったが、燕麦は1225—6年にはあまり生産的ではなく、1286—7年の4倍に比較して2倍弱であって、60年の間の著しい農業改善を示している。ライ麦は1225—6年に7倍、1286—7年に5倍弱であった。トプサムが1225—6年に燕麦とライ麦を導入した。一般に穀物生産は60年後より非常に

表5 Werrington

area date	wheat		rye		large oats		small oats		total	
	a.	r.	a.	r.	a.	r.	a.	r.	a.	r.
1298			22	2			106	0	128	2
1350	8	0	8	2	22	0	40	0	78	2
1391	28	2	7	0	24	0	2	2	62	0
1420	26	0			24	0			50	0
1450	29	0			24	0			53	0
1470	24	0			21	3			45	3
1480	20	0			16	2			36	2
1499	20	0			14	1			34	1

a.=acre, r.=rood

表6 Hurdwick

area date	wheat		rye		large oats		small oats		total	
	a.	r.	a.	r.	a.	r.	a.	r.	a.	r.
1332	2	0	18	2	1	1	76	0	97	3
1347	?		18	0	?		?		?	
1373	?		23	0	?		?		?	
1398	8	2	33	2	29	0	60	2	131	3
1427	24	0	24	2	38	0	48	0	134	2
1450	23	0	24	3	35	0	37	0	119	3
1470	22	0	25	0	44	2	23	0	114	2
1480	12	0	20	0	40	0	24	0	96	0
1492	17	0	30	0	23	0	53	0	123	0
1504	17	0	29	0	28	2	56	0	130	2
1517	22	0	20	2	31	2	49	1	123	1
1538	20	0	18	0	36	0	46	0	120	0

表 7 Principal Grains in 1308-9

manor	demesne	peasant's holding
Tiverton	wheat, rye	oats, rye
Exminster	oats	pill-corn*
Plympton	wheat	wheat

* pill-corn=naked oats

少なく、あまり有利ではなかったのである⁽¹⁷⁾。いま各種の穀物の作付の状態をみると、タヴィストック修道院領のワーリントンとハードウィックが表5と表6のごとくであり⁽¹⁸⁾、デヴォン伯領のティヴァートン、プリンプトン、エクスマインスターの状態は、表7のごとくであって⁽¹⁹⁾、ここにおいても、かつてつくられた大麦が栽培されなくなっ

ている。以上の少数のマナーの状態によってデヴォンの農業全体を推すことは許されないが、農業は基礎産業であるから、領主・農民ともに土壌の改良に努めたようにみえる。

その間に〈新都市〉創設の著しい動きが始まり、十三・四世紀には51の農村都市とも言うべき小都市がつくられた⁽²⁰⁾。その最初のものはタヴィストックであり、同修道院長が1105年ヘンリー一世より週市開設の勅許状を受け、次いで、1116年に年市（聖ラモンの祝日前後3日、8月29—31日）開設の勅許状を受けて、この大マナーの一郭に〈商業区〉‘port’が形成された。年代は不明であるが、同院長が1185年までに都市創設の勅許状をヘンリー二世より獲得した。このタヴィストックの発展は、ダートムーアの錫鉱開発を契機とするものであった⁽²¹⁾。その間に、スティーブン時代の内乱を経て、ヘンリー二世とアキテーヌ公の女子相続人エリアノーア Eleanor との結婚により、アキテーヌが英領となって、対岸の南部の海港の発展を促すこととなった。その結果、十二世紀末期よりダートマス Dartmouth、十三世紀初期よりプリマス Plymouth が急激に興り始めた。また、エクセター司教が内陸のアシュバートン Ashburton とクレディトン Crediton に都市を創設し、デヴォン伯がプリンプトン、ホニトン Honiton およびティヴァートンに都市を創立した。これらの〈新都市〉創設の動きは、既述のごとく、その後ますます活発になるが、その中には、ラッケンフォード Rackenford、バウ Bow およびコリフォード Colyford のごとく、領主の期待に反して、位置が悪くて発展しえず、〈失敗した町〉‘failed town’として単なる村に止まるところが少なくなかったと言われる⁽²²⁾。それでも尚過半のものが存続し、中にはティヴァートンのごとく、十五世紀後期に至って台頭したところがある。ところで、これらの〈新都市〉の存在意義がその週市と年市にあったことは、言うまでもないであろう。

本来サクソン人は征服後防衛の必要からかなりの規模の集団をなして定着したのであろう。そして、かれらの支配が安定した後、遅れて到来した者や自然増加によって過剰となった者が、周辺の森林地や荒蕪地を開墾して多くの小村を形成して定着した。これらの小村の中に発展して集村化し、それからさらに別れて小村が形成されたことも稀れではない。これらの事実は、本来の大教区や大所領がその後幾つかの教区や所領に分割されていることによって知られているところである。例えば、コリトン Colyton の大教区が後代に9教区に分割され、ペイントン Paignton、ブリクサム Brixham から各2箇村が分立し、それぞれ3教区に分たれたこと⁽²³⁾、内陸3マイルのシドベリ

Sidbury からシドマス Sidmouth とソルカム・リージス Salcombe Regis がおそらく小漁村として植民されたことが推定されており、これらがその後別箇の所領となったこと⁽²⁴⁾等によく現われている。これらの本来の定住の集村の大部分は有核村落 nucleated village であり、十三世紀以降手工業とり分け毛織物手工業が農村へ拡がり始めた後も、ブロントン Braunton のごとく、農村として存続したところが少なからずあることが知られている⁽²⁵⁾。しかし、農村の小農や過小農が土地からの生産物と牧畜によってかれらの生活を充足しえていたのではなく、自ら生産しえないか不足

する生活資料を、かれらの生産物の一部を売って入手しなければならなかった。他方、表8の縮絨ミルの分布が示すごとく、北部、東部、東南部⁽²⁶⁾、中部および南部に毛織物手工業が拡がりつつあったことが知られるが、その拡大・発展のためには、原料の羊毛、織糸、織り上げ縮絨された毛織物あるいは染色・仕上げられた毛織物の市場の開設が不可欠である。当時のデヴォンの毛織物は、地元の〈粗い羊毛〉‘coarse wool’を原料とする‘straits’の名で知られる短尺物(幅1ヤード、長さ12ヤード)のダズン dozens であった。そのころのこの手工業の中心として、バーンスタプル Barnstaple、クレディトン Crediton、エクセター、ホニトン Honiton、アシュバートン Ashburton およびトトネス Totnes の名

表8 Fulling Mill, Devonshire

No.	Place Name	Date
1	Dunkeswell	1238
2	Honiton	1244.5
3	Tiverton	同上
4	Chulmleigh	13 C. 未
5	Sampford Courtenay	同上
6	Hartland (2基)	同上
7	Harpford	同上
8	Moretonhampstead	同上
9	Barnstaple	c. 1327
10	North Molton	同上
11	South Molton	同上
12	Crediton	同上
13	Chudleigh	同上
14	Slapton	同上
15	Bovey Tracey	同上

C.=Century, c.=circa

が著われており、とくにトトネスで生産された良質のランセット russet は評判をえていた⁽²⁷⁾。当時エクセターにおいていかほどのダズンが生産されていたかは、明らかでないが、販売に供される毛織物の検査官 aulnager の数字によれば、1394—99年の5箇年におけるデヴォンの商人が販売した計8235½クロス(クロスは幅2ヤード、長さ24ヤードの毛織物、短尺物のばあい、クロスに換算される)のうちエクセターの商人が2828½クロスを取引したと言われる⁽²⁸⁾。それとともに、エクセターがデヴォンで最も重要な毛織物手工業の中心であったと言われているが、当時城壁の西側を流れるエクス川の水を利用する縮絨ミルがいかほど存在したか否かは、明らかではない。

それはとにかく、十四世紀末に海外に輸出されたデヴォンの毛織物は300—400クロスに止まり⁽²⁹⁾、大部分が州内もしくはその他の国内市場で売却されていた。デヴォンの毛織物手工業の飛躍は、後述するごとく、十五世紀に導入されたカージイ Kersey の生産がエクス川溪谷から下流域地方を中心としてしだいに拡大することに始まるのである。

以上のごときデヴォンの経済的発展の跡は、所領の評価査定額、付課された〈特別税〉‘Subsidy’あるいはその一方マイル平均額等を見ることによって、ある程度知ることができる。まず D. B. の

評価査定額が異常に低いことは、すでに述べたところであるが、これを単に各州の総額によってみると、記載35州中25位となる⁽³⁰⁾。イングランド第3位の広大な州であるから、かくのごとき順位のみによって、その実態を推すことは誤りである。大半が丘陵地で掩われていることを考えるならば、全体としてはむしろ最低に近い状態を示唆するものとみななければならない。それより140年を経た1225年の俗人に付課された十五分の一〈特別税〉の、史料を欠除するチェッシャー、ダーラムおよびサックスを除くイングランド全土において、1方マイル平均3.7シリングの最低水準にあり、その間あまり著しい改善がなされなかったことを⁽³¹⁾示している。それより一世紀余り後の1334年の同様な〈特別税〉の、史料を欠除するチェッシャーとダーラムを除くイングランド全土において、1方マイル平均6.7シリングにまで上昇し、前記の2州を除く39州中32位にあった⁽³²⁾。これをこの課税の収入総額によってみると、司教座都市、都市および古来の王領地に付課された十分の一〈特別税〉の収入£241 2s. 4d. とその他に付課された十五分の一〈特別税〉の収入£712 12s. 8d. との合計£953 15s. 0d. は、39州中16位であり⁽³³⁾、ロンドンを含む39州の司教座都市と都市の中で、プリマスが23位、エクセターが27位であって⁽³⁴⁾、その間の都市の成長と農村の発展をある程度示していると言える。

しかし、この発展の動向は、かの周知の〈黒死病〉Black Deathの襲来によって阻止されることとなった。それは最初1348年8月隣接のドーセットの港メルカム・リージス Melcombe Regis に達し、1週か2週のうちにデヴォンを襲い猛威を振った。その結果、少なくとも住民の半ばが消滅したと言われる⁽³⁵⁾。それより29年後の1377年の〈人頭税報告〉Poll Tax Returns 当時、デヴォンが尚北部地方や西北部地方とともに最も過疎の州の一つであったことは⁽³⁶⁾、その打撃の甚しかったことをよく示している。デヴォンの回復は遅く、既述のカージイの生産の導入と拡大とともに、ようやく始まったように見える。そこで、この問題については、項を改めてみることにする。

- (1) Benjamin Donn *A map of the County of Devon*, 1765. Reprinted in Facsimile with an Introduction by W. L. D. Ravenhill, 1965. Devon and Cornwall Record Society and the University of Exeter. 手近の地図としては、ドライヴァーのための *Bartholomew's Road Atlas of Great Britain* が便利である。
- (2) L. Dudley Stamp; *The Land of Britain and How It is used*, 1948. Pub. for the British Council by Longmans, Green and Co. p. 41. William G. Hoskins; *Devon and Its People*, 1968. Kelley. p. 29.
- (3) Hoskins; *Ibid.*, pp. 27-8.
- (4) Wallace T. MacCaffrey; *Exeter, 1540-1640 The Growth of an English County Town*, 1975. Harvard U. P., p. 16.
- (5) Herbert E. Hallam; *Rural England 1066-1348*, 1981, Fontana History of England, p. 165.
- (6) Henry C. Darby; *Domesday England*, 1977. Cambridge U. P., p. 336. Appendix 1 より抜粋。
- (7) Darby; *Ibid.*, Appendix 3 より抜粋。
- (8) *A New Historical Geography of England*, ed. by H. C. Darby, 1973. Cambridge U. P., p. 46.

- (9) Darby ; *Domesday England*, p. 164.
- (10) W. G. Hoskins ; The Making of the Agrarian Landscape. W. G. Hoskins and H. P. R. Finberg ; *Devonshire Studies*, 1952. Jonathan Cape, p. 317.
- (11) Hallam ; *Ibid.*, p. 165. Eilert Ekwall ; *The Concise Oxford Dictionary of English Place-Names*, 1974, Fourth Edition, Oxford, p. 292.
- (12) Hoskins ; The Making., p. 303, p. 303 n. 1.
- (13) *Ibid.*, pp. 318, 319.
- (14) *Ibid.*, p. 320.
- (15) *Ibid.*, p. 322.
- (16) H. P. R. Finberg ; *Tavistock Abbey A Study in the Social and Economic History of Devon*, 1951. Cambridge U. P., pp. 110-13. Table IX, X.
- (17) Hallam ; *Ibid.*, pp. 171, 172.
 デヴォンの十三世紀の農業の実態に関する研究は極めて少なく、立教大学教授鶴川馨氏のデヴォン伯領の貴重な研究 'The Economic Development of Some Devon Manors in the Thirteenth Century', *Reports and Transactions of the Devonshire Association*, XCIV, 1962, pp. 630-83 があり、ハラムも専ら同氏の研究に拠っている。
- (18) Finberg ; *Ibid.*, pp. 101-3. 表5と表6は Table VI と Table VII より抜粋作成。
- (19) Hallam ; *Ibid.*, p. 172. 表7はハラムの記述より作成。
- (20) M. Beresford and H. P. R. Finberg ; *English Medieval Boroughs ; A Handlist*, 1973, Newton Abbot. p. 38. Table 1.
- (21) Finberg ; The Borough of Tavistock, pp. 174-77. Hoskins and Finberg ; *Devonshire Studies*.
- (22) Hoskins ; *Devon and Its People*, pp. 51, 52.
- (23) Hallam ; *Ibid.*, p. 166. Hoskins ; The Making of the Agrarian Landscape. p. 304. Hoskins and Finberg ; *Ibid.*
- (24) Hoskins ; *Ibid.*, p. 304.
- (25) Finberg ; The Open Field in Devon. Hoskins and Finberg ; *Ibid.*, pp. 265-88.
- (26) W. G. Hoskins ; *Devon*, 1972. Newton Abbot. p. 125. 表8はホスキンスの記述より作成。
- (27) *Ibid.*, pp. 125, 126.
- (28) *Ibid.*, p. 126.
- (29) E. M. Carus-Wilson ; *The Expansion of Exeter at the Close of the Middle Ages*, 1963, Pub. by the University of Exeter. p. 6.
- (30) Darby ; *Domesday England*. p. 336. Appendix 1 General Statistical Summary by Domesday Counties.
- (31) R. A. Donkin ; Changes in the Early Middle Ages, p. 78. *A New Historical Geography*. ed. by Darby.
- (32) Donkin ; *Ibid.*, p. 79.
- (33) Hoskins ; The Wealth of Medieval Devon, pp. 214, 215. Hoskins and Finberg ; *Devonshire Studies*.
- (34) R. E. Glasscock ; England circa 1334, p. 184. *A New Historical Geography*., ed., by Darby.
- (35) Hoskins ; *Devon and its People*, pp. 67-69.
- (36) Alan R. H. Baker ; Changes in the Later Middle Ages, p. 191. *A New Historical Geography*., ed. by Darby.

(2) 州都エクセターの台頭

地域的市場圏形成の指標となるものは、〈地方の商業中心地〉‘provincial entrepot’の出現である。それは単なる商業中心地というのではなく、歴史的にここを拠点とする商人＝前期的商人の資本力と絶対王政に支持された支配体制として〈商人寡頭制〉の行政・司法・経済に亘る厳しい統制の下に、地域全体に対して直接・間接の影響力ないし統制力を及ぼした商業中心地である。この州においてかかるものとして発展しえた都市が、州都エクセターにほかならなかった。絶対王政期に都市の支配体制が〈商人寡頭制〉であることは、多くの都市において共通するところであるが、ここにおいてはいっそう少数者に権力が集中されていた。その理由は、ギルドの力が弱かったからであると言われる⁽¹⁾。

それはとにかく、かかる商業中心地は一朝にして現われるものではなく、^{ヒンター・ランド}背後地におけるなんらかの生産（このばあいには、とくに毛織物手工業）の発展を必要とする。そこで次ぎに、この都市の消長を、この州における毛織物手工業の拡大と併せて、みることにする。

元来エクセターの起源は、ローマ占領期にまで遡る。七世紀にアングロ・サクソン系の民族が侵入してきて、同後期にデヴォンを支配した。そして、ここがコーンウォールのケルト系民族に対する抑えと防衛の拠点として要塞化された。その後エドワード懺悔王の治世に、ここに司教座がおかれた⁽²⁾。それ故に、これよりこの西南の半島部の行政・軍事・宗教上の中心として栄えたものごとく、H・C・ダービ Henry C. Darby は、D. B. 当時この人口がすでに2,000以上、おそらく3,000を越えていたと推定している⁽³⁾。エクセターはエクス川の河口よりほぼ4マイル溯る東岸に位置し、直接公海へ通ずる港であるのみならず、ロンドンより南部地方を西方へ通ずる幹線道路が通り、東北、西北、西南および南からの道路が会合する交通の要衝に当たっていた⁽⁴⁾。しかし、当時のデヴォンは、既述のごとく、農村人口数が多かったとは言え、丘陵地が多く、D. B. 記載の諸州の中で、小屋住み農の数は第3位、奴隷の数は第1位という後進州⁽⁵⁾であって、次ぎの十二世紀においても、とくに経済的に著しい発展は現われていなかったように見える。続く十三世紀に毛織物手工業が東部において拡がり、エクセターがその中心都市の一つであったことが知られているが、デヴォン伯コートネイ Courtenays, Earl of Devon が、エクス川河口に近い自領のトプサム Topsham を海港として発展させるために、エクス川に堰を築いて船舶が溯行することを阻止し⁽⁶⁾、エクセターの発展に暗影を投ずることとなった。以上のことは、ヘンリ二世の治世に徴収された〈助成金〉aids, auxilium と1334年に付課された〈特別税〉とによってドゥームズデイ都市^{バウ}の順位をみると、6位より26位に落ち、さらに、後者の〈新都市〉をも含む主要都市中の順位が27位であって、同州の23位のプリマスよりむしろ下位にあったことに示唆されているものごとくである⁽⁷⁾。

その後間もなく百年戦争(1339—1454)が勃発して、フランスとの貿易が中断され、1348, 9年に

は、かの〈黒死病〉‘Black Death’が襲来して、人口が半減した。この打撃から立ち直ることは容易でなく、1377年の〈人頭税報告〉によれば、このころのエクセターの人口がほぼ3,000であり、これはヨーク York やブリストル Bristol の四分の一にすぎず、グロスター Gloucester, シュリューズベリ Shrewsbury 等約20の地方都市より劣り、ウースター Worcester, ヘリフォード Hereford のごとき西部の小司教座都市と肩を並べるものであったと言われる⁽⁸⁾。

貿易港としてエクセターに代わるトプサムの輸出入は、つねに少なく、リチャード二世の治世後期において、イングランドより輸出された毛織物年3万クロスないし4万クロスのうち、デヴォンから輸出されたのは、300クロスないし400クロスにすぎず⁽⁹⁾、ぶどう酒の輸入も百年戦争によって大打撃を受けて激減し、ボルドー Bordeaux の輸出は戦前の五分の一に減じており、十四世紀末にイングランドに輸入されたぶどう酒年約12,000トンのうち、デヴォンに到来したのは、年数百トンにすぎなかった⁽¹⁰⁾。この州の毛織物は、ヨーロッパ市場において、フランドルの上質の毛織物は言うまでもなく、リンカン Lincoln やスタンフォード Stamford の上質の毛織物とも到底競争しうるものではなく、イングランドの毛織物手工業が西部地方へ拡大発展したときに、遙かに後に残されることとなった⁽¹¹⁾。

しかし、E・M・ケアラス-ウィルソン Eleanora M. Carus-Wilson によれば、十五世紀に入って大陸市場の需要に質的变化が起り、それまでの上質の厚手の高価な刷毛織物に対する需要が減じ、むしろ多少とも粗く織ったいっそう軽量の中位の価格の刷毛織物に対する中産層の人々による需要が急激に増しつつあり、十五世紀中葉に南西フランスのあらゆるところにおいて、イングランド産の中位の価格の毛織物が売れており、当時類似の毛織物が中部ドイツ、バルト海地方、スペイン、ポルトガルおよび地中海地方においても取引されたと言われる⁽¹²⁾。この州のカージイ生産に発展の機会を与えたのは、まさしくこのころであり、国内のみならず海外への輸出もしだいに増加した。しかし、間もなく国内におけるランカスター家とヨーク家とが王位を争ったバラ戦争(1445-85)が始まり、フランスが支援するランカスター家が敗れたために、一時フランス市場が殆んど全滅した。1475年エドワード四世がルイ十一世と戦って敗れて休戦条約が結ばれ、平和が回復された。両国の戦争状態は事実上これをもって終わり、それまで両国の商人を拘束していたあらゆる制限が撤廃された。その結果、フランスと取引を行なった諸港の関税報告によれば、例えば、大部分ブリストルからフランスへ輸出された毛織物は、この平和に続く20年間に倍化し、さらに三倍に増加した。デヴォンからの輸出は、総量においては遙かに少ないが、増加率においていっそう著しく、1450年代と1460年代の年平均ほぼ1000クロスから1481-3年の年平均6000クロスに達し、条約締結後の20年間の年平均3000クロスは、十四世紀末のほぼ10倍の増加を示すものであった⁽¹³⁾。この平和の回復による結果は、フランスからのぶどう酒輸入においても、同様であって、1497年ヘンリ七世とシャルル八世との間にブローニュ協約 the Convention of Boulogne が結ばれたとき、

その量は1万トンを越え、それより数年間この水準を維持していた。その間デヴォンの輸入は、前世紀末の200—300トンに比して、1,000トンに達し、その大部分はトプサムを経由してエクセターに輸入された⁽¹⁴⁾。1497年以後エクセターの工業はさらに発展し、その殆んどが毛織物より成り、1500—1510年の10年間におけるデヴォンからの輸出は、イングランド全体の年平均81,000クロスのうち、年平均8,600クロスであり、1501—2年のごときはほぼ11,000クロスに及んでいたのである⁽¹⁵⁾。

かくして、フランスとの平時の貿易関係の回復とともに、エクセターのフランスとの絆は、デヴォン産の製造品が存在するという事実によって著しく強化されることとなった⁽¹⁶⁾。モラ教授が、ノルマンディの商業史に関する著作において、1475年以後のノルマンディの貿易の鋭い上昇、そして、1497年以後のそれ以上の上昇を強調した⁽¹⁷⁾。これらの上昇は正確にエクセターの商業史に照応しているのである。要するに、トプサムを経由するエクセターの貿易の拡大とフランスの復興との間の密接なる関係は明らかであり、それは単に毛織物とぶどう酒の交易に止まらず、遙かに複雑多様であった。フランス市場は政治・経済上異なる三つの地域より成り、その一は、かつての英領のガスコーニュ Gascogne、その二は、事実上両国から長く独立していたブルターニュ Bretagne、その三は、ときに英領、ときに仏領であったノルマンディ Normandie である。ガスコーニュからは、ぶどう酒と大青、ブルターニュからは、大量のリネンと少量のキャンパス、綱、まいはだおよび塩、そして、ノルマンディからは、種々の農産物（小麦、ナッツ、林檎、エンドウ豆、ソラ豆）と工業製品（リネン、キャンパス、サテンおよびタフタ、小間物類、高級呉服、織物製品とくに男女の帽子、種々の木製品と金属製品）を輸入した。しかし、エクセターが長く貿易を行なったのは、ガスコーニュとブルターニュとであり、さらに、スペインやポルトガルにおいても、たえずカージイに対する需要が増加しつつあった。これに対して、スペインからは、北部の大量の鉄と南部のぶどう酒、オリーブ油、石鹼、ワックス、蜂蜜、アーモンド、その他果実とその加工品、そして、ポルトガルからは、類似の品々と並んで、砂糖とこれを使用した加工品、高価な真紅の染料グレイン grain が輸入された。これらの国以外にも、低地諸国からときおり洋紅、明礬、ホップ、その他雑多な商品を輸入していた。すべてこれらの諸国に対する主要なる輸出品は、言うまでもなく、主として未染か明るい色に染色した毛織物カージイであり、その他少量の皮革、馬、錫、鉛、タイルおよび種々のしるめ細工品であった⁽¹⁸⁾。また、これらの海外貿易のみならず、沿岸貿易も盛んに行なわれていたものごとく、ノーフォークとサフォークから紅にしん、もやしおよび大麦が齎らされ、アイルランドから鮭が輸入されていたと言われる⁽¹⁹⁾。以上のごとき貿易において使用された船舶は、それぞれの国の船のこともあったが、多くはイングランドの船、就中地元の船であって、このことが少なからずエクス川の入江とくにトプサムの造船業の発展を促進した⁽²⁰⁾。

当時のデヴォンの毛織物手工業は、依然東部を中心に拡大しつつあり、早くに中心都市として確

立していたエクセターとトトネス以外に、十五世紀末近く新たにティヴァートン Tiverton, カロンプトン Cullompton およびソマーセットのトントン Taunton が勃興した⁽²¹⁾。L・M・ニコルズ Laura M. Nicholls によれば、十五世紀末期と十六世紀初期において、ダートマスが専らトトネスの急激なる工業発展とそこの人々の企業心に負っていたと言われる⁽²²⁾。

ティヴァートンとカロンプトンとは、東部の毛織物手工業都市の中でとくに著しい。ティヴァートンは十二世紀末にデヴォン伯によって創設された〈新都市〉であるが、その後長く単なる村に止まっていた。それが十五世紀末に毛織物手工業によって急激に台頭し、種々の色に染色したカージイを生産していた。カロンプトンも同じころに興り、ティヴァートンと競っていた⁽²³⁾。ソマーセットのトントンは中級の染色した毛織物の生産によって発展しつつあり、はじめエクセターより近いブリッジウォーター Bridgwater より大青のごとき染料を購入し、つくり上げた毛織物をブリッジウォーターを經由してブリストルへ出していたが、十五世紀最後の10年の間に、ブリッジウォーターよりエクセターへ変えて、トプサムから年平均 300—400 クロスを輸出し、1502—3年には、それが900クロス以上に達した。その輸出先はおそらくスペインとガスコーニュであり、その経路がブリッジウォーターからエクセターへ移動したことは、十六世紀初頭の10年におけるブリストルの毛織物輸出の減少に反映されている⁽²⁴⁾。

このころのエクセターは、これらの都市で仕上げられた毛織物の集散地であり、織元＝問屋制商人が必要とする原料および生産用具類（大青、洋紅、グレイン、明礬、羊毛用刷子、同櫛および仕上げ用鋏）並びに、高級毛皮類、高級呉服、香料、砂糖等の奢侈品から石鹼、ベット用リネン、筆記用紙、その他種々の消費財までの集散地であった。以上のごとく、エクセターは〈商業中心地〉として発展しつつあったのみならず、製粉、製パン、醸造業のごときあらゆる都市に共通の工業に加えて、高度に発展した鞣皮、鐘鑄造、とり分け毛織物手工業、とくに染色、仕上げ業等の中心地であった⁽²⁵⁾。これらの工業活動の多くは、市の西側の城壁外で行なわれた。その城壁の下で、エクス川からひかれた多くの水車用水路が、多数の製粉用ミルのみならず鞣皮用ミルと縮絨ミルを動かしていた。これらのミルは市当局によって架設・所有されているものとデヴォン伯によって架設・所有されているものがあり、それぞれの職に従う者や問屋制商人に対して定期で貸し出されていた⁽²⁶⁾。近辺に縮絨した毛織物の乾燥場があり、城壁に張枠を鉛のボルトで固定する張枠用拘 4000 を購入したことが知られている⁽²⁷⁾。

以上のごときエクセターの発展は、富裕なる商人層（貿易商人と問屋制商人）の成長を物語るものであり、J・フーカー John Hooker はかかる商人の一人としてクラッグ Crugge なる者について述べている。これによれば、かれは1498年市内において一軒の家を購入し、その後著しい商人となった人物であると言われる。かれはしばしば錫商人として描かれているから、おそらく錫によって資産を築いたもののごとく、錫作業場を所有し、精製した錫を小舟でエクセターへ運び入れ、そ

こから船積みしていたのである。このころはまさにエクセターの錫貿易が拡大しつつあったときである。しかし、かれの事業は、これをもって終わらず、すべてのエクセターの商人と同じく、かれに利益を齎らすいかなるものでも取引していたものごとく、毛織物と皮革を輸出する一方、鉄、ぶどう酒、大青、その他諸々の商品を輸入していた。さらに、デヴォン伯所有の Eks 島の縮絨ミルを借り受けており、蓄積した利潤の一部を土地にも投資していたのである⁽²⁸⁾。

土地の購入はイングランドの商人の共通の現象であるが、縮絨ミルを借りていたことは、かれが一面問屋制商人であったことを示唆している。

それはとにかく、多くの地方都市は多かれ少なかれ首都ロンドンと交易を行っていた。エクセターは、ロンドンの毛皮商からセブル、狐および白テンのごとき高価な毛皮類を、食料品商から胡椒、香料の類を、そして、冒険商人が持ち帰った洋紅、明礬等を入手し、ぶどう酒、オリーブ油、砂糖、果実類を海路ロンドンへ積み出していた⁽²⁹⁾。ロンドンはまた、十六世紀初期までに、イングランド各地において生産された刷毛織物のますます重要な市場となり、そこから当時のヨーロッパの大商業中心地アントウェルペン Antwerpen へ積み出し、ポーランド、ドイツおよびボヘミアへ供給されたのである⁽³⁰⁾。十五世紀までドイツの毛織物市場には専らイタリアから供給されていたが、十六世紀におけるイタリアの内乱による毛織物手工業の壊滅によって⁽³¹⁾、イングランドの毛織物がとって代わったのである。北欧や中欧の毛織物市場へ毛織物を輸出しようとするデヴォンの商人は、ロンドンにおいてデヴォン産の毛織物を買入れ、そこから自らそれをアントウェルペンへ積み出していた。例えば、ティヴァートンの父 J・グリーンウェイ John Greenway は、まずロンドンの市民権をとり、十五世紀末か十六世紀の初めに呉服商カンパニに入会し、自ら大陸へ毛織物を輸出した。さらに、低地諸国において取引する冒険商人組合が新たに設立されたときに、これにも入会している。また、1518年ロンドンにおけるこの組合の役員を選ぶ会議において、エクセターの J・コールズヒル John Colshill が地方都市を代表する4名中の1名に選ばれている⁽³²⁾。これらのことによって明らかであるごとく、いまやデヴォンの毛織物は、対岸のフランス、ポルトガル、スペインのみならず、アントウェルペンを通じて北欧や中欧にまで市場を拡大していたのであり、その輸出量は十四世紀末の20倍以上、1440年代の4倍以上であって、イングランド全体の毛織物輸出におけるデヴォンの毛織物の占有率は、一世紀以前と比較して、10倍にまで発展しているのである⁽³³⁾。さらに、その間のイングランド全体の毛織物輸出が大きく増加していることを思い起こすならば、デヴォンの毛織物手工業の発展がそれだけ著しかったと考えなければならない。

以上のごとき状況の下に、毛織物＝カージイの生産と取引の中心であるエクセターの地位の向上もまた著しく、1523—7年の〈特別税〉の徴収額において主要都市中5位に躍進し、人口がほぼ8000と推定されている⁽³⁴⁾。このエクセターの地位の向上は専ら市民の上層を形成する少数の貿易

商人や問屋制商人の活動の結果であり、その間にかれらの間から選ばれたいっそう少数の者たちによる支配の体制がつくられつつあった。それがここにおける〈商人寡頭制〉の樹立にほかならない。しかし、この支配体制が確立するまでには、尚かなりの年月を要し、いっそうの経済的発展のためには、直接公海へ通ずる海港としての地位を回復しなければならなかった。そこで、これらの問題については、節を改めて見ることとする。

- (1) MacCaffrey; *Exeter, 1540-1640.*, p. 18.
- (2) *Ibid.*, p. 16.
- (3) H. C. Darby; 2 *Domesday England. A New Historical Geography.*, p. 71.
- (4) Benjamin Donn *A map of the County of Devon.*
- (5) Darby; *Domesday England.* Appendix 3. 抜粋したデヴォンの数字については、表2参照。
- (6) MacCaffrey; *Ibid.*, pp. 19, 126. E. M. Carus-Wilson; *The Expansion of Exeter at the Close of the Middle Ages.* 1963. pub. by the University of Exeter, p. 5.
- (7) R. A. Donkin; 3 *Changes in the Early Middle Ages.* p. 134, Table 3.2 The ranking of provincial towns, 1154-1334. R. E. Glasscock; 4 *England circa 1334*, p. 184, Table 4.3 Ranking list of chief towns in 1334. *A New Historical Geography.*
- (8) Carus-Wilson; *Ibid.*, p. 5.
- (9) *Ibid.*, p. 6.
- (10) *Ibid.*, p. 7.
- (11) *Ibid.*, p. 7.
- (12) *Ibid.*, p. 8.
- (13) *Ibid.*, pp. 8, 9.
- (14) *Ibid.*, pp. 10.
- (15) *Ibid.*, pp. 10, 11.
- (16) *Ibid.*, p. 11.
- (17) M. Mollat; *Le commerce maritime normand*, Paris, 1952, p. 138. cited by Carus-Wilson; *Ibid.*, p. 11.
- (18) *Ibid.*, pp. 12-15.
- (19) *Ibid.*, p. 17.
- (20) *Ibid.*, p. 16.
- (21) *Ibid.*, p. 17.
- (22) *Ibid.*, p. 17.
- (23) *Ibid.*, pp. 18, 19.
- (24) *Ibid.*, pp. 20, 21.
- (25) *Ibid.*, p. 22.
- (26) *Ibid.*, p. 22.
- (27) *Ibid.*, p. 23.
- (28) *Ibid.*, pp. 23-25.
- (29) *Ibid.*, p. 26.
- (30) *Ibid.*, p. 28.
- (31) 拙稿『「商業革命」期におけるヴェネツィアの経済的消長について』城西大学経済・経営紀要第I巻第1号 pp. 177, 178.

- (32) Carus-Wilson, *Ibid.*, pp. 28, 29.
- (33) *Ibid.*, pp. 29, 30.
- (34) *Ibid.*, p. 31. Hoskins; *Provincial England Essays in Social and Economic History*, 1964. Macmillan. p. 70 Table 1. p. 72. Alan R. H. Baker; 5 Changes in the Later Middle Ages. p. 243. Table 5.1 The ranking of towns, 1334-1525. *A New Historical Geography*.

[未完]

(本稿は56年度文部省科学研究費の助成による成果の一部である。)